猫が届けた遺書

志茂田景樹

猫が届けた遺書

猫が届けた遺書

一九八九年八月一〇日　初版印刷
一九八九年八月二〇日　初版発行

著　者　志茂田景樹
発行者　嶋中鵬二
印刷所　図書印刷
製本所　小泉製本
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二－八－七
振替　東京二－三四

©1989 Printed in Japan

ISBN4-12-001847-4

目　次

猫が届けた遺書　5
オセロットのコートの女　49
死神の風車　93
青磁の壺が隠した凶器　137
雪の夜に消えた柩　179
誘拐は夕焼けのなかで　223

装幀　福山　小夜

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

猫が届けた遺書

猫が届けた遺書

1

——ことしは、冬のくるのが早いかもしれない。

滝一郎は、ベランダで、ナツメの枝から黄ばんだ葉が落ちるのを見てつぶやいた。

夕暮れに近いが、風がつめたい。

三週間ほど前は、まだ残暑で、この時間、街を歩くと、汗をかいたものである。やっと涼しくなったな、と思ったら、一足飛びに秋が深まってしまった感じである。

ベランダには、白いテーブルと椅子が出ていて、滝一郎は、椅子のひとつにかけて、シェリー酒を飲んでいた。

辛口の、さっぱりしたタイプだった。

庭へ、若い女が入ってきた。辛子色のワンピースを着ていた。落葉とマッチして、すらっとしたプロポーションの体をひきたてている。

「——滝ちゃん」

若い女は、ベランダを見あげて、手を振った。
「よお、玲か。玄関の鍵があいているからあがってきなよ。ついでに、シェリーを飲んでいるから、グラスもな」
滝は、グラスを持ちあげて、手を振った。
玲と呼ばれた若い女は、右手を気どってあげて応えると、玄関のほうへ小走りに消えた。
「また事件か」
滝は、苦笑して、シェリー酒のグラスを口に運んだ。
玲のフルネームは、竹下玲である。
二十五歳で、キャリアウーマンや、センスのいい若妻に読者の多い女性誌ルネエルボンの編集者をしている。
ルネエルボンは、フランスの同名の女性誌の日本編集版である。雑誌の女性編集者というと、ラフな服装をしている者が多いが、玲がシックでエレガントなファッションなのは、そのためである。
その玲が、ときどき、事件を持ちこむのである。捜査の手が入った事件のこともあるが、まだ警察の知る犯罪になっていない事件のこともある。
玲がどうしてそんな事件を持ちこめるかというと、玲の父親が警視庁のベテラン警部のためだった。
そして、滝が、またか、といった顔をしながら、内心でそれをよろこぶのは、元検事だったからである。

滝は、国立大学の法学部在学中に、司法試験に合格している。そして、司法修習生を経て東京地検入りし、若くして難事件を担当して、上司に将来を嘱望されていたが、考えるところあって、突然、辞職した。

組織がいやになったのである。

ところで、滝の父親は、貿易商である。

いま滝がいるベランダは、父親が西麻布の高台に所有している広大な滝邸の敷地内にある別棟のベランダである。

古い、小ぶりな洋館で、二階建て、一部、煉瓦造りだった。滝は、この洋館に、六十歳になる老お手伝いさんと暮らしている。家族にもわずらわされることなく、優雅な生活である。

滝のいまの職業は、父親の康介が経営する滝通商の取締役業務部長ということになるが、週に二日出社するかしないかである。言わば、絵を描いたり、乗馬をしたりして好き勝手なことをして、遊んでいる生活である。

本人は、充電中と称しているが、ことしの春に三十歳になり、結婚する気配さえない。

もっかの生き方は、好奇心のおもむくことをやる——だけに徹している。

玲は、

「涼しいわねえ」

と、言いながら、ベランダへ入ってきた。

手に持っていたグラスをテーブルに置く。滝は、そのグラスに、シェリー酒を注ぎ入れて、

「前ぶれもなしに、不意に現われたところを見ると、やっかいな事件をかかえてきたな」

と、言った。
「アッタリィ！」
玲は、滝の斜め向かいの椅子にかけた。
「どんな事件なんだい？」
「えーと、夏の終りに起きた美人美容院経営者殺人事件をおぼえている？」
「ああ、おぼえているよ。あれ、難航しているらしいね」
「そおみたい。うちの親父がグチみたいに事件の話を私にするときは、どーにもならない、という場合なのよ」
「それはわかっているよ。で、どんなふうになっているの？」
「殺された理由がさっぱりわからないらしいの。交遊関係は、とっても複雑。被害者の日ごろの生活も、奇々怪々。捜査員は、頭が宙がえりしてしまっているんだって」
玲は、小ぶりのハンドバッグから、カールトン一〇〇メンソールと、渋い銀色のライターをとり出して、テーブルに置いた。
そして、カールトン一〇〇メンソールを、一本、口にくわえた。
しなやかな指をしている。長く伸ばした爪に、シルバーメタリック色の、マニキュアをほどこしている。
「とにかく、被害者が飼っていたトラネコが、事件後、行方をくらましたことに、うちの親父は、すごく関心を持っているんだけど、おもしろい事件と言えば、事件ねえ」
玲は、そう言うと、カールトン一〇〇メンソールに火をつけて一服すると、目を細めて滝の顔

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を見つめた。
滝の反応を窺っているようだった。

2

――事件は、八月の終りに起きた。
現場は、被害者の自宅である。被害者は、川瀬織代という二十八歳になる美容院経営者だった。自宅は、西麻布にある高級マンションの七階にあって、3LDKである。
織代は、独身で、トラネコの桃と暮らしていた。
織代の美容院は、麻布十番にある、小粋なビルの二階にあった。
火曜日が定休日である。三人の美容師、美容師見習いを置いている。ちいさいながら、客層は、よかった。
事件の起きた日は、水曜日で、織代は、午後の九時すぎに店を出ている。
そして、翌日の夕方に、店の片腕として織代が信頼を置いている美容師が不審に思って訪れたところ、織代は、ベッドで殺されていたのである。
発見者の美容師は、島本るなと言って、二十五歳になる。ときどき、織代のところに泊まることがあってキーを預けられていた。
織代は、全裸で殺されていた。
死因は、絞殺である。

るなが発見したとき、織代の胸には、トラネコの桃が乗っかっていた。
桃は、るなを見ると、
「ぎゃっ！」
と、すさまじい鳴き声をあげて、ぱっと跳んだ。そのまま、思わずのけぞったるなの肩越しにドアの外へ飛びだして姿を消した。
るなは、リビングルームに飛びこんで、電話に駆け寄ると、一一〇番した。
以上が、事件の発端である。
検視の結果、死亡推定時刻は、発見時から二時間をさかのぼらないとされた。それは、剖検の種々の結果からも、裏づけられている。
そのため、発見者のるなは、当初、疑われて、きびしく事情を聴取されている。
だが、るなには、織代を殺す動機がまったくなかった。待遇に不満もなく、織代とは、気もあっていた。それに、るなは、忠実なタイプで、織代を尊敬していた。
さらに、るなは、織代の紹介で、そのいとこと交際し、相思相愛になり、来春には、結婚することになっていた。
捜査本部は、あらゆる角度から捜査して、るなはシロという結論を下している。
織代の交遊関係は、多彩にして、異常だった。
肉体関係のあった男だけでも、十指を超える。捜査本部は、そのなかで、五人の男を、とくに、マークした。
その五人とは――ファッションモデルの倉本明、不動産会社社長の井之倉博、私大生の山上次

郎、美容院経営者の浅見透、それに、土木建設作業員の高田鉄雄である。
織代は、倉本に惚れていたらしい。だが、倉本には、梨花という妻がいた。織代は、倉本の住まいを訪れて、梨花ともども一夜をあかしたこともある。
語りあかしたわけではない。
3Pを行ったのである。
井之倉は、パトロンという存在であったらしい。麻布十番に、マリルノアールという、ファッション性の強い美容院を出すときも、かなりの額の援助を受けている。
山上とは、ドライブによく行っていた。織代は、ブルーのポルシェを持っている。自分が、運転したり、山上に運転させたりして、しばしば、東北や北陸や、山陽路へ遠っ走りしている。
そして、ややヤクザっけのある、坊っちゃん気質の山上を、織代は、鞭打ったり、浣腸したりして、いじめ愛していた。
つまり、山上は、マゾヒストだった。
この山上に、織代は、小遣いをあたえて、生活の面倒まで見ていた。
浅見は、おなじ美容院経営者として、友だちづきあいをして、その延長で、セックスも行っていた。
織代が、もっとも惚れこんでいた相手は、高田であったらしい。高田は、酒ぐせがわるく、暴力体質の男だった。
二十八歳で、たくましかった。
高田は織代に、よく暴力をふるっていた。ふつうの暴力ではない。縛ったり、乳房をアイスピ

ックで突ついたり、陰部にロウソクから溶けて垂れるロウを落としたりしていたという。
その異常な行為を、織代は、歓(よろこ)んでいた気配がある。いや、はっきりと求めていた。
山上の場合のそれと、逆転している。
織代は、マゾなのかサドなのか。
捜査員の多くは、首をひねった。
そして、織代の異性関係以外の生活は、正体不明で、奇怪なところがあった。
織代は、両親とも健在で、きょうだいもいる。四人姉妹の末っ子だった。
だが、肉親とは、没交渉である。福島県内の女子高を卒業して、上京したっきり、実家と音信不通になっている。
美容師の免許も、独力でとっている。実家は、織代が美容師になったことも知らず、美容院を経営していたことも知らなかった。それでも、住所だけは、織代が住民票をとり寄せたことでわかっていた。一度、両親がそろって訪れようと電話をかけたが、織代は、
「暇がないのでこないで」
と、にべもなくことわっている。
ただ、るなと結婚することになったいとこの川瀬秋彦だけは、例外で、美容師時代から交流があった。
織代は、ボランティアグループに所属して、寝たきり老人の世話をする反面、深夜にトッピな服装で外出し、六本木や芝浦の最先端のディスコで踊りまくることがあり、非常にエキセントリックな日常だった。

そして、プードルを三匹も部屋で飼ったかと思えば、突然、犬ぎらいになって保健所にひきとらせ、猫を飼いはじめるというように、対極から対極へ好みが移ることがあった。

たいていの女は、犬が好きだと猫がきらいだし、猫が好きだと犬は飼わないものである。

外出時の服装なども、レトロ趣味の服装をしたり、髪を赤く染めて、ヘビメタの女性歌手のようなかっこうをしたりして、まったくまちまちだった。

私生活には、そのように、傍目(はため)から見て理解に苦しむことが多かった。

捜査本部は、マークした五人を調べて、容疑者を絞ろうとしたが、その五人には、みな完璧なアリバイがあった。

織代が殺されたと思われる月日、時間は、八月二十七日の午後五時から同七時のあいだである。

倉本は、その日、横浜のホテルで行われていたファッションショーに出演している。ファッションショーは、午後の部と夜の部に分けて行われている。

夜の部が終ったのは、午後九時であった。

井之倉は、二十六日から二十八日まで、九州に出張していた。同行者もいて、九州では、十数人の人間と会っている。

山上は、友だちと、映画を観て、ディスコに行って、深夜に帰宅している。ちゃんと、その裏は、とれていた。

浅見は、自分の店にいて、店が終って、まっすぐ帰宅していた。店を出た時間は、夜の八時すぎである。

高田は、仕事をおえて同僚数人と居酒屋やスナックで飲み、深夜の一時に宿舎に帰宅している。

五人には、殺人動機もこれといって強いものはない。
ただ、井之倉と山上には、あることはあった。
山上は、井之倉が織代のパトロンと知って、井之倉に対して嫉妬していた。セックスのとき、そのことで織代をなじり、織代は頭にきて、なおサディスティックに山上の体を鞭打つというぐあいであったらしい。だが、殺人動機とするには、いかにも弱かった。
井之倉は、織代の異性関係に疑いを抱いて、興信所に、その素行調査を依頼していた。報告書は、数人の男との情事の現場写真がつけられた分厚いものだった。
現場写真といっても、そのものずばりではない。ラブホテルに入るところと、出てきたところの両方を撮ってセットにしたものとか、カーセックスにふけっているところを盗み撮りしたものなどである。
だが、井之倉は、織代に常々、
「私は、あなたひと筋よ」
と、言われていたものだから、烈火のように怒った。
いままで援助したものを返せ、と迫ったが、織代には、ゾッコン惚れこんでいる。男たちと別れさせるほうを選んだ。
やはり、殺人動機としては、弱い。
激怒のあまり首を絞めてしまった、というのならわかるが、その時期はすぎて、惚れた愛しい織代を手放すまいとしている。
織代を殺してしまっては、元も子もないわけである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com